様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３４３１２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０２４６

研究課題名（和文）大正・昭和期において象徴主義の形成を果たした各種出版物の研究

研究課題名（英文）Study of publications that created the image of symbolism in the Taisho and Showa Period

研究代表者
長沼　光彦（NAGANUMA, Mitsuhiko）

京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：７０４６０６９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では象徴主義思潮が、従来の文学史の記述とは異なり、その後の自然主義や民衆詩派の隆盛の中で消えていったたわけではないことを確認した。むしろ、明治末から大正期の自然主義や民衆詩派の思潮と混じり合い、昭和期のモダニズムへとつながっていくのである。特に出版物を見ると、その特徴は明らかである。大正期より、象徴詩の翻訳が盛んになされ、昭和初期には、象徴詩の限定出版がなされている。大正・昭和期を通じて、象徴詩が芸術作品として価値を再認識され、むしろ出版を通じて大衆化されたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study revealed the history of the symbolism in Japanese publications.Unlike the description of the conventional literary history of Japan,symbolism did not disappear in the rise of naturalism and democracy.In the Taisho period ,Symbolism and democracy affect each other.And in the Showa period,Modernism was born from symbolism.Especially in the publication, its features is obvious.In the Taisho period, the translation of symbolic poetry had been actively carried out.And in the Showa period, symbolic poetry had been many publications of limited.Symbolic poetry was re-recognize the value as a work of art.And Symbolic poetry was accepted to the masses.

研究分野：日本文学

キーワード：日本近現代詩　象徴詩　詩史　芸術性　大衆性　文学史　限定出版　出版史

１．研究開始当初の背景
(1)従来の文学史では、象徴主義や自然主義など、作者側の思想を並べて記述する。ただし文学は、書籍や雑誌など媒体に置き換えられ、読者に受容されるものでもある。この文学作品の媒体に置き換えられた受容的側面に注目するのが、本研究である。

(2)出版媒体は、作者とは異なる主体が制作に関わり、読者の需要に応えるものである。作者自身の発信意図とは異なる、出版媒体の発信および表現要素に注目するのが、本研究である。

(3) 従来の文学史は、詩作品の変遷を、象徴主義、自然主義、民衆詩派など、思潮の交代として記述し、特に、芸術派と民衆派が対立する構図に整理する。しかし出版物としての芸術は、一定の受容者を必要とする。大衆から完全に乖離した出版物としての芸術は、存在しえない。出版物を通じて、芸術の大衆化を考察するのが本研究である。

２．研究の目的
(1)従来の研究で注目されなかった、入門書や限定本など詩の出版物、および大学に属した研究者の著作や研究出版物を通して、大正・昭和期の詩人と詩の受容者が、象徴主義という詩的理念と実作をどのように受容していたのか、当時の文化的な文脈を調査し明らかにする。

(2)出版や研究活動を、文学的価値を再構築する場と見なし、これらの活動の調査を通じて、詩に関わる言説が種々の媒体を通じて共有、また大衆化され、普及する過程を明らかにする。

(3)象徴主義は、芸術的志向の強い思潮と見なされてきた。ただし書籍として出版するには、一定の大衆性を獲得し、売買される必要がある。象徴主義に関わる出版物を対象として、文学の芸術性が、大衆性とどのような関係を持つのか調査する。

３．研究の方法
(1)出版物そのものが、研究対象であるため、全集など、再編集されたテキストによらず、実物調査を重んじる。公共図書館の所蔵物を調査すると共に、実物資料を収集し、所属研究機関で公開する。

(2) 出版物の装幀を、美的価値や文学的志向の投影と見なし、文化的文脈を読み取る記号表現として分析する。また、出版物に付された奥付や広告などを、出版書肆の意図を読み取る材料として調査する。

(3)従来の文学史は、大正・昭和期に出版された文学啓蒙書の内容を元に、歴史の見取り図を記述する場合がある。大正・昭和期の啓蒙書を調査することにより、文学史の見取り図そのものの成り立ちと妥当性を考察し、文学史を見直す。

４．研究成果
(1)昭和初期に、象徴詩など西欧の詩を取り上げた限定出版が盛んに行われる。秋朱之介や斉藤昌三が代表的な出版人だ（秋朱之介『書物游記』1988、八木福次郎『書痴斉藤昌三と書物展望社』2006）。大正期に、フランスを中心とした象徴詩の文学的イメージは、フランス装を模した装幀に投影されていた。上製本が上等だとする常識に対し、並装本、仮装本に、かえって文学趣味的味わいがあるとする、価値の転倒が行われるのである。さらに、昭和期の限定本の装幀は、フランス装に、和紙や綴じ紐を用いるなど、日本のイメージを加えるものが現れた。ここには、日本のアイデンティティを重んじる同時代の思潮と共鳴が見られる。これら装幀と同時代の思潮や美意識との関わりについて事物調査を通して明らかにした。これら調査した資料の一部は、冊子『詩の本第二集』にまとめ、ブログ「詩の本」で公開している。

(2)昭和期の限定出版書肆は、会報や専門誌を発行するなど、読者とのコミュニティを作ろうとしていた。秋朱之介の編集した『書物倶楽部』（1934）や、野田誠三の編集した『手帖』（1935-1937）がその例である。どのような装幀に美術的価値があるか、またどの作品が芸術的か、会報を通じて伝えるのである。これは不特定多数の読者を対象とする、出版経営とは異なる方法である。出版を通じて文学的イメージを伝え、時には啓蒙しようとする、出版書肆の伝達方法と過程を明らかにした。また、出版書肆と読者のコミュニティをふまえ、作者を中心とした文芸思潮の見取り図とは異なる、文学イメージの伝達過程の記述の必要性を確認した。これら調査した資料の一部は、冊子『詩の本第二集』にまとめ、ブログ「詩の本」で公開している。

(3)明治末から大正期にかけての、文学雑誌が形成するコミュニティは、必ずしも不特定多数に向けられるものではなく、投稿や会員制を通じて、密接な関係を作り上げようとするものがあった。象徴詩の普及も、このコミュニティを通じて行われる場合があり、雑誌『文庫』（1889-1910）の投稿欄を担当し、会員制雑誌『詩人』（1907-1908）を発行した、河井醉茗の啓蒙活動はその一例である。この例をふまえ、出版を通じて文学コミュニティを作り上げる、文学イメージ伝達の過程を明らかにした。また、河井醉茗の象徴詩紹介記事は、啓蒙活動であるゆえに、初学者にも理解しやすいように、詩の一節一節を取り上げ、読解する形式を採っていた。当時の文語表現を用いた象徴詩は、難解だと評価されていた

が、その理解を助け、むしろ芸術を神秘性から解放しようとしている。当時の象徴主義のイメージを書き換え、一般の興味に接続しようとしているのだ。これをふまえ、文学イメージの伝達と共有は、媒体の性質によってその質が変化しうることを確認した。文学イメージの普及の過程を明らかにするには、普及に関わる媒体の性質を考察することが必要なのである。この成果の一部は、論文「河井醉茗と象徴主義―象徴主義の普及に関わる役割と位置」にまとめ発表した。

(4)従来の文学史では、象徴主義から自然主義、さらに民衆詩派へと、順に文学思潮が展開したと整理されている。しかし実際は、それぞれの思潮は明確に分離していたわけではなく、明治末から大正期にかけて、象徴主義と種々の思潮が相互に入り交じりながら、表現の理論を作り上げていた。象徴主義、自然主義、印象主義、頽唐派にまたがる、川路柳虹の詩作と理論は、その一例としてあげられる。印象主義を仲立ちとして、象徴主義と自然主義は、表現理論としてつながっていた。いずれも、眼前の事物と心象をどのように結びつけるか、という共通の問題意識を持った思潮だったのである。これらの思潮の接続は、川路柳虹にとどまらず、同時期の相馬御風や三木露風にもその例を見ることができる。象徴主義などの、分かりやすい名称に縛られない、作品や思潮の分析が必要であることを確認した。この成果の一部は、論文「川路柳虹と象徴主義・自然主義・印象主義・頽唐派」にまとめ発表した。

(5)従来の文学史では、大正期の詩的見取り図として、象徴主義など芸術派と、民主主義を重んじる民衆詩派との対立として整理される場合がある。しかし実際には、民衆詩派の詩人も、象徴主義の詩に傾倒していた時期があり、その後も関わり続けた例もある。例えば、民衆派詩人の出版物である、白鳥省吾『現代詩の研究』（1924）や福田正夫『自由詩講座』（1929）では象徴主義が、詩に必要な内面イメージの表現として取り上げられている。芸術派と民衆詩派を対立させる従来の文学史の記述は、日夏耿之介『明治大正詩史』(1933) の価値観を反映したものであり、実際に細かい事例を見れば、単純に図式化できないことが分かる。また、文学史の記述が、過去に示された図式をそのまま受け入れている場合があり、実際の文学思潮の関係を調査するには、その図式を相対化する必要があることを確認した。これら調査した資料の一部は、冊子『詩の本第二集』にまとめ、ブログ「詩の本」で公開している。

(6)文学思潮を鳥瞰的な図式にまとめた先駆的な書物として、厨川白村『近代文学十講』（1912）がある。版を重ねロングセラーとなった同書は、中原中也など大正昭和期の文学者に影響を与えている。同書は西欧の文学思潮の変遷を、一般に理解しやすく解説した啓蒙書である。ただし、西欧の事情を説明したものであり、日本の文学思潮の変遷とは必ずしも重なるものではなかった。大正・昭和期には、あらためて日本近代の文学史を紹介する入門書が次々と刊行されるが、それらは著者の思想や文壇的立場を色濃く反映したものであり、必ずしも客観的、あるいは公平な記述と言えるものではなかった。日夏耿之介『明治大正詩史』（1933）も、その一例である。むしろ、これら多様な史観を比較することで、同時代の文学思潮の影響と闘争の関係が見えてくる。種々の文学史を客観的な記述としてではなく、思潮を反映したテキストとして見ることで、同時代の複合的な言説の関係を分析することができることを確認した。これら調査した資料の一部は、冊子『詩の本第二集』にまとめ、ブログ「詩の本」で公開している。

(7)昭和初期から登場するモダニズムでは、象徴主義は、現代の実験的な表現実践の先駆として位置づけられる。春山行夫が『詩と詩論』（1928-1931）に載せた評論などがその例である。また、モダニズムでは、新しい時代にふさわしい言語実験を意図するため、それ以前の詩人が試みた美的表現を重んじない。モダニズムの意図は出版物の装幀にも反映される。大正期の象徴主義など芸術派は、ヨーロッパの美術品を模したモチーフなど、芸術らしい芸術の美的イメージを出版物の装幀に反映させていた。一方、モダニズムの出版物は、幾何学模様を用いた、無機質なデザインに、現代性をイメージさせようとしていた。モダニズムが象徴主義を扱う際にも、シンプルな幾何学的レイアウトの中に、折り込んでいく。これをふまえ、昭和初期には、同じ象徴主義に関わるもイメージでも、限定本の美術的表現と、モダニズム出版物の即物的幾何学的表現が、並立して存在していたことを明らかにした。同じ象徴主義という名称で公表される言説であっても、その内容は、媒体や文脈によって多様なのである。これら知見の一部を、論文「中原中也の『四季』―「近時詩壇寸感」の詩壇観」に反映させた。

(8)大学に属した研究者によるアカデミズムは、モダニズムが重んじた知的側面と、限定出版に代表される美的側面の、両方に関わっていた。研究雑誌の発行により、西欧文学の知識や情報を提供し、文学の知的側面の享受者を増やした。象徴主義に関わるものでは、小林秀雄が寄稿した『仏蘭西文学研究』（1926）などの例がある。明治末の象徴詩人も、まずはアカデミズムのもたらす情報を理論の支えとした。また昭和期には、大学教員に執筆依頼をした文学案内リーフレット「岩波講座日本文学」などが発行され、知の大衆化が進められている。また、大学の研究者自

身が翻訳した詩集も、昭和初期の限定本として発行されている。矢野峰人『志るえつと』（1933）、『山内義雄訳詩集』（1933）、鈴木信太郎『ポエジイ』（1934）などの例がある。また限定出版ではないが、鈴木信太郎『近代仏蘭西文学象徴詩抄』（1924）などの例もある。これらアカデミズムと文学的価値の普及との関わりについて、象徴主義を中心に調査した。詩人中心の文学史とは異なる、文学思潮史を構想する必要性を確認した。この成果の一部は、「川路柳虹と象徴主義・自然主義・印象主義・頽唐派」にまとめ発表した。また、ら調査した資料の一部は、冊子『詩の本第二集』にまとめ、ブログ「詩の本」で公開した。

(9)以上の具体的事例から、時系列の中に思潮の交代として記述する文学史に限界があることを確認した。象徴主義という語は、同時期にあっても、文脈によって肯定的にも否定的にも使われる。また、自己の属するグループと対立するグループに対しては、仮に象徴主義の理論を肯定的に受け止めていても、あえて否定的な言葉として公表する場合もある。言葉の分析は、そのテキスト自体の分析、テキストの載る媒体の分析、またその媒体の置かれた状況の分析など、複合的に考察する必要がある。これらの知見は、間テクスト性の理論としてすでに既存の研究理論の中で提示されていたことであるが、実例の分析においては、より緻密な考察および手続きが必要であることがわかった。実際の分析調査の際には、テクスト論的観点から対象を緻密に分析すると共に、発表された文章など言説相互の関係を見渡さなければならず、微視的かつ巨視的な検討が必要であることを確認した。今後は、これらの知見をふまえ、間テクスト性の文学史とでもいうべき、新たな記述方法を考案していく必要がある。それは、言説と言説の関係を細部と全体の関係にわたり、記述する方法である。この知見は今後の研究課題として発展させる計画である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①長沼光彦、川路柳虹と象徴主義・自然主義・印象主義・頽唐派、京都ノートルダム女子大学研究紀要、査読無、第 45 号、2015、pp.99―110、機関リポジトリ公開予定
http://id.nii.ac.jp/1057/00000186/
②長沼光彦、河井醉茗と象徴主義―象徴主義の普及に関わる役割と位置、京都ノートルダム女子大学研究紀要、査読無、第 44 号、2014、pp.101―112、
http://id.nii.ac.jp/1057/00000174/
③長沼光彦、中原中也の『四季』―「近時詩壇寸感」の詩壇観、四季派学会論集、査読有、第 17 集、2012、pp.17―45

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）
①長沼光彦、京都ノートルダム女子大学人間文化研究科人間文化専攻、詩の本第二集、2015、23

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://blog.goo.ne.jp/poegy
ブログ「詩の本」　調査の過程で集めた資料を公開した。

６．研究組織
(1)研究代表者
長沼　光彦（NAGANUMA, Mitsuhiko）
京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・准教授
研究者番号：７０４６０６９９

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：